ＲＳＳＣ異文化研究会　２０１２年４月研究会報告

１．日時：２０１２年4月２６日（木）　１３：３０～１４：５０
２．場所：セントポールズ会館　２階
３．講演：「自立をめざして１７年―フィリピン・マガタ地区の子供たちとの泣き笑い物語―」
４．講師：金子多美江様（ＲＳＳＣ４期生）
５．出席者（敬称略）
（2期）御守、山田、藤田、松岡、秋吉、福田、宮武、野口、佐藤、後藤（3期）前田、松原、川原木、杉山（4期）田島、池田、平子、菅野、青山、大戸、濱崎、小池、大槻、中嶌、高田、石原、小倉、金子、新澤、石井、西山、坂元、中山
ゲスト：（1期）増田、椎橋（2期）北澤、福井、森（4期）平澤、金澤、中嶋、山田、竹生柴本、阿部、今野、吉田、大堀（5期）長谷川
合計５０名（1期2名、2期１３名、3期4名、4期３０名、5期1名）
６．講演趣旨

金子様

講演風景

あみあみ会バザー

経歴：１９３４年　東京・池袋生まれ
日本子どもの本研究会会員
日本出版文化振興財団（ＪＰＩＣ）読書アドバイザー
大学卒業後、公立小学校教師を３８年勤められる。その後学校、図書館、書店等で読書活動を行う傍ら、フィリピン僻地の子供たちに教育支援を続けています。

概要：海外教育支援協会（ＪＯＥＳ）の一員として、フィリピンの僻地にある山岳少数民族の村落であるマガラ地区の子供たちの教育支援を１７年にわたり取組んでこられました。
現地の写真交えて、具体的に取組の内容を説明いただきました。

①フィリピンという国
フィリピンは、人口の１割が外国に出稼ぎに行っており、仕送りで生きている人が多い。国全体の生産性も非常に低く、貧しい国である。７，０００以上の島々から成るが、言語も島の数位あると言われ統一した言語が無い。タガログ語は国語に定められ、ルソン島を中心に発達したが、他島では好まれていない。共通語は英語であるが、多重言語国家である。文化的に発展しない理由の一つでもある。歴史的に見ると、マゼランが１５世紀に軍隊を引きつれ侵略し、キリスト教も持ち込まれた。マガタも攻められ、山の中に逃げ込み狩猟生活をしてきた人々もいた。森林伐採により自然崩壊も進み、動物、生物も滅んで、里に下りても先住フィリピン人が住んでいて、より条件の悪い所に住んだ。その人々が山岳少数民族と言われた。

②フィリピンという国との出会い
マガタの人々のあまりにひどい生活状況に、神父が援助を求め日本の教会に知らせて来た。
私たちもなんとか助けたいと行くことにした。学校を退職したばかりで海外旅行をしたいと思っていたこともあり、軽い気持ちで行った。

③マガタを訪ねて
マニラから１日がかりで着いたところがマガタと思ったが、さらに３つの川を渡った所であった。何も無く、人々はうつむき、ぼろを纏っていた。子供は、日本の子供に比べ発達が遅れて３歳位低いと感じた。生まれた子供の半分は死んでしまうとのことである。

ここでは反抗せず、黙ってうつむいているのが良いと言う「沈黙の文化」があった。しかし、簡単な訳を付けた獣の本には、見たことも無い動物もいて大変な驚き、反響があった。
住民からは学校が欲しいとの要望があり、４本柱にやしの葉を並べた簡素な学校を作った。文字の読み書きが出来ないと騙されたり、仕事に就くことが出来ないためである。このような事を踏まえ今後の方向性を定めた。読書教育、農業教育、職業教育の３点である。

④読書教育について

日本に帰り、本を集め留学生会館等でタガログ語の翻訳者を探した。まとめて１年に１回位持参したが、子供たちに大変喜ばれた。地区には１８の学校があるが１０の学校を訪問、次年度に訪問した時には本はぼろぼろであった。本を一ヶ所に集約するため、仲間が住み込みコンクリートの図書館を作ったが、朝から晩まで多くの人たちが来るようになった。また、さらに奥地にも子供たちがいるとのことで、図書館長のリサは出向いて読み聞かせをするようにした。また、自己表現をしたいとの要望もあり紙芝居作りも始めたが、作品は日本の文化協会で入選した。図書館は文化センターの役目を果たしている。

⑤職業、農業教育について

竹細工やミシンでの縫い物、作物を売って多少の収入を得ることが出来るようになった。このことにより、子供たちは公立学校に行けれようになった。しかし、度重なる台風により畑、やぎ等の家畜も流されることも多い。２年前のオンドイ台風は、激しい台風で壊滅的被害を受けた。急遽、理事長が訪問し、子供たちの不登校対策として登校した子供には２Ｋの米を配布することにした。

⑥失敗に学ぶ

慈悲の心を持ってしても、相手には受け入れられないこともある。価値観の相違である。子供たちにお土産のあめをあげたら、翌日道に包みのビニールが沢山捨ててあった。ここでは、捨てた物は土に返ると言う生活様式がある。ビニールは土に返られないとは知らなかった。また、トイレが無く不潔なので、トイレを作ったが使用しない。これは、狭い所に閉じ込められるより広い所で天井を見ての方が良いからである。日本とは違う価値観がある。水の問題では、多額の寄付を受けたこともあり憤慨したが、受け入れ態勢の手を打ったか、反省と共に教育の必要性を痛感した。飲料水を確保するため、山の向こうから細長いパイプを通したが、水が出なくなった。原因は、途中の住民がパイプに穴を開け水を取っていたからである。水が無いので次は井戸の要望があった。しかし、これも数年で壊れ使用できなくなった。壊れたら修理するとの思いに至らないのである。

⑦今後について

援助の契約は、今年３月までであるが、あと３年は面倒を見てやりたいと思っている。
笠原先生からは、後継者作りの必要性を言われている。現地で日本語の勉強をしている２名の女性を昨年９月に日本に呼び寄せ、１２月に帰国するまで教育をした。子供たちも実力をつけ今までより難しく、ヒストリー性のある本も欲するようになった。また、農業、職業教育では専門の方についてきちんと勉強をする必要がある。現地の人たちも技術的なことを考慮しなかったり、行政への働きかけをしなかったことを反省しているようである。勉強をしていく中で人間としての自覚や自信が出来てきているので、これからも貧しいながら一生懸命生きている現地の人たちの援助をして行きたい。

７．２０１２年度の役員紹介（敬称略）

代表　田島教雄　　会長　御守陽治
副代表　島田一郎　山田利之　福田哲郎　池田信幸
会計　大戸澄子　　書記　平子俊記　菅野光照

(２０１２．４．２８平子記)